

滑稽雑談

申下

特別
~ 5
6326
14



教苗葉復茂年穀豐稔也是今神祇官以白豬白馬白雞
 祭御歲神之緣也○詩經大田曰既方既臯既堅既好不
 狼不莠去其螟螣及其蟊蠹無害我田穡田祖有神秉畀
 炎火註言其苗既盛矣又必去此四蟲然後可以無害田
 炎火中之木然非人力所及故願田祖之神為我持此
 夜而付之火也○唐書
 去山東大蝗姚崇奏秉畀炎火此除蝗之義○三代實錄
 曰董仲舒祭法螟螣賊害五穀之時於害食之列縣內清
 淨處解之攘之故陰陽察於城北船困修此祭蓋挾清
 淨之處○此の流よれそは○舊儀遊庭了回の中
 を送るの儀は仲舒を東て証智をとり弟やくとと仰り聖賢の徳は
 不又はあらとよ送るまつるを又壇を攘ふの儀に
 撰虫

○公の根原曰撰虫是あつら式ありしや
 あつら殿上の道達とを教ふ人もありしは撰虫をとりしを
 よえしといふは揚川の中西より始る虫多しを松虫後虫と云ふ

○是ハ公年根原年
 中乃の少と九月の亦は記さるるは俗用を也結る其年なは九月の神
 を今又家より記さる虫合虫初不同と

△虫類 ○古詩曰蚕語即蠶 ○源氏物語
 此を云とてあつらさせ結ひくものともは家を結ひく

○雍列府志曰下
 賀茂社司婦人造養蟲之籠内安一小筒盛土敷苔植露
 草草也以紫白系作藤花形自籠上垂下其體堪供觀
 右のよ虫合とて稱すは虫類の類も又虫類とて神としとて考

○三才口會曰子母炮内奉刻木信
 以藥線纏之外用褚紙捲緊合口此用警營或夜間遠放
 又曰地雷以生鉄鑄成實藥斗許檀木砧砧至底砧内
 空心裝藥線一條擇冠必由之地堀地作坑連々數十埋

○花火
 夫木 根原のりは此を考ふるはつらむは虫類あり
 光俊

白菊	水仙	杜若	唐松	富士	山吹	白櫻	垂柳	繩火	鼠火	菊火	桔梗	楓葉	孔雀
灰箱	灰箱	鐵箱	灰箱	灰箱	鐵箱	灰箱	灰箱	灰箱	灰箱	灰箱	灰箱	灰箱	灰箱
二十一	十二	十八	十八	廿四	十一	二十三	三十三	三十五	六廿	十	三	四	消
分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分
硫	硫	硫	硫	硫	硫	硫	硫	硫	硫	硫	硫	硫	硫
白粉	白粉	白粉	白粉	白粉	白粉	白粉	白粉	白粉	白粉	白粉	白粉	白粉	白粉
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分
鐵	鐵	鐵	鐵	鐵	鐵	鐵	鐵	鐵	鐵	鐵	鐵	鐵	鐵
五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五
分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分
松	松	松	松	松	松	松	松	松	松	松	松	松	松
檜	檜	檜	檜	檜	檜	檜	檜	檜	檜	檜	檜	檜	檜
七	二	一	二	廿	三	二	廿	二	廿	三	二	八	十
分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分
硫	硫	硫	硫	硫	硫	硫	硫	硫	硫	硫	硫	硫	硫
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分
鐵	鐵	鐵	鐵	鐵	鐵	鐵	鐵	鐵	鐵	鐵	鐵	鐵	鐵
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分
硫	硫	硫	硫	硫	硫	硫	硫	硫	硫	硫	硫	硫	硫
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分
鐵	鐵	鐵	鐵	鐵	鐵	鐵	鐵	鐵	鐵	鐵	鐵	鐵	鐵
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分

地雷干坑中内用小竹筒通藥線土掩如窩機用藏火賊不知而踏動則地雷從下震起火焰冲天鉄塊如飛蝗着人即死乃孔明之器也○又曰地嵐紙筒砲火藥桶飛天噴筒火妖大蜂窠各有一月令廣美曰宛署記燕坡燧諸製有声者曰響炮高起曰起火々々中帶炮連声者曰三級浪不響不起旋遠地上者曰地老氣築打有虚实分兩有多寡有花草人物等形者花児名百餘種別以泥函者曰沙碓兒以紙函者曰花筒以筐函曰花盆總之曰烟火動賊家有集百巧為一架分四門次第傳藝通霄○是亦の流とて或は洞鉄木竹紙等々符と知り藥とらるる軍陣の賊敵を奪ふの具之は火勢の形とて薬方の秘法を言ふとあり之は經その七多の多獸乃より此形と別今世遊戯の觀より傳ふ中華の鳥雀銃又花筒燧噴筒のやくは弘仁の頃流砲初て傳れしは流しを考ふるは中華の鳥雀銃又花筒燧噴筒の製法より造るる傳生ハ燈子七火の藥方と載たり又俗の製法と記す

八重櫻	八重梅	袖火	白蓮	躑躅	芙蓉	日輪	錦木	絲櫻	大梨	梔子	吉野	金花山	百口傳
燭	燭	燭	燭	燭	燭	燭	燭	燭	燭	燭	燭	燭	燭
十	四	五	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分
硫	硫	硫	硫	硫	硫	硫	硫	硫	硫	硫	硫	硫	硫
三	三	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分
五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五
厘	厘	厘	厘	厘	厘	厘	厘	厘	厘	厘	厘	厘	厘
籬	萩	椿	橘	萍	月輪	嵐山	都忘	忍草	落楓	花盛	己上	五十二種	合抹之修製
燭	燭	燭	燭	燭	燭	燭	燭	燭	燭	燭	燭	燭	燭
廿	廿	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十
分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分
硫	硫	硫	硫	硫	硫	硫	硫	硫	硫	硫	硫	硫	硫
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分	分
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
厘	厘	厘	厘	厘	厘	厘	厘	厘	厘	厘	厘	厘	厘

和俗といふ所のて是を二音に撰其を撰武列
 己上五十二種合抹之修製
 花盛 己上 五十二種 合抹之修製
 落楓 己上 五十二種 合抹之修製
 忍草 己上 五十二種 合抹之修製
 都忘 己上 五十二種 合抹之修製
 嵐山 己上 五十二種 合抹之修製
 月輪 己上 五十二種 合抹之修製
 萍 己上 五十二種 合抹之修製
 橘 己上 五十二種 合抹之修製
 萩 己上 五十二種 合抹之修製
 籬 己上 五十二種 合抹之修製

○ 律の調

黄鐘太簇姑洗蕤賓夷則無射陰六為呂大呂夾鐘中呂
 林鐘南呂應鐘是也名曰律者叙名曰律述也所以述陽
 氣也律曆志曰呂旅助陽氣也○王次抄云大以呂律四
 分時春秋律也夏冬呂也季分半月正三五律也重月二
 十六八呂也○唐制抄云又調子分時呂既多之律也應呂之月調
 黄鐘一歌呂の多しをそと天は司る平調盤波律の多しをそと切は司る
 ○律の調 律の調 律の調 律の調 律の調 律の調 律の調 律の調
 ○班婕妤詩曰新製齊紈素皎潔
 如霜雪裁為合歡扇團々似明月出入君懷袖動搖微風

○ 扇を置

如霜雪裁為合歡扇團々似明月出入君懷袖動搖微風

書ありては又新綿しんめんと云ふ者七月十日に注國しゅこくより禁裏きんり綿めんとも有りたる
と新綿しんめんの巾あき個ごとと申す也い注書しゅしょハ公こうの少すくしといふも然しかる也い蓋かきし建たて
の人は依よりあきむぬり藤ふじ垣かきよりふなりといふ七月十日に注國しゅこくのよりまれば綿めん
よりし注書しゅしょを考かつて本綿ほんめんの注八月草部しゅほつそうぶに注す

夫木

注何なんなる富士ふじ糸子いとこのいわらふといふ根ねの者ものれと云ふ何なんなる
為家ためいけ

衣類

○信濃しんねう之の徹てつ記き云い七月しちがつ秋あきの衣い 懐あひこ前まへ苗なほ 裏うら

袖かみの衣い 表おもて前まへ黄わう 秋あきの衣い 表おもて前まへ黄わう 秋あきの衣い 表おもて前まへ黄わう 秋あきの衣い 表おもて前まへ黄わう

是こハ八月はちがつ也なり ○是こハ八月はちがつ也なり ○是こハ八月はちがつ也なり ○是こハ八月はちがつ也なり

時出鷹

○星山せいざん李り燭じゆく鷹たか鷗う考かう論ろん曰い取と鷹たか七月しちがつ

上旬じやうじん与よ上じやう時じ内ない地ち者もの多おほ塞さい外がい者もの少すく八月はちがつ上旬じやうじん与よ次じ時じ下げ旬じん

与よ下げ時じ塞さい外がい之の鷹たか畢ひ至いた ○西園さいえん与よ初しよ日にち多おほ雀せき也なり夏なつ也なり冬ふゆ也なり

よ入い之の日にち八月はちがつよ入い之の日にち七月しちがつ也なり ○西園さいえん与よ初しよ日にち多おほ雀せき也なり夏なつ也なり冬ふゆ也なり

仍なほ若ごと初しよ日にち多おほ雀せき也なり夏なつ也なり冬ふゆ也なり ○西園さいえん与よ初しよ日にち多おほ雀せき也なり夏なつ也なり冬ふゆ也なり

○藤ふじ垣かき苗なほ也なり初しよ日にち多おほ雀せき也なり夏なつ也なり冬ふゆ也なり ○西園さいえん与よ初しよ日にち多おほ雀せき也なり夏なつ也なり冬ふゆ也なり

七月しちがつ也なり ○西園さいえん与よ初しよ日にち多おほ雀せき也なり夏なつ也なり冬ふゆ也なり ○西園さいえん与よ初しよ日にち多おほ雀せき也なり夏なつ也なり冬ふゆ也なり

初しよ日にち多おほ雀せき也なり夏なつ也なり冬ふゆ也なり ○西園さいえん与よ初しよ日にち多おほ雀せき也なり夏なつ也なり冬ふゆ也なり

初しよ日にち多おほ雀せき也なり夏なつ也なり冬ふゆ也なり ○西園さいえん与よ初しよ日にち多おほ雀せき也なり夏なつ也なり冬ふゆ也なり

初しよ日にち多おほ雀せき也なり夏なつ也なり冬ふゆ也なり ○西園さいえん与よ初しよ日にち多おほ雀せき也なり夏なつ也なり冬ふゆ也なり

初しよ日にち多おほ雀せき也なり夏なつ也なり冬ふゆ也なり ○西園さいえん与よ初しよ日にち多おほ雀せき也なり夏なつ也なり冬ふゆ也なり

初しよ日にち多おほ雀せき也なり夏なつ也なり冬ふゆ也なり ○西園さいえん与よ初しよ日にち多おほ雀せき也なり夏なつ也なり冬ふゆ也なり

初しよ日にち多おほ雀せき也なり夏なつ也なり冬ふゆ也なり ○西園さいえん与よ初しよ日にち多おほ雀せき也なり夏なつ也なり冬ふゆ也なり

初しよ日にち多おほ雀せき也なり夏なつ也なり冬ふゆ也なり ○西園さいえん与よ初しよ日にち多おほ雀せき也なり夏なつ也なり冬ふゆ也なり

初しよ日にち多おほ雀せき也なり夏なつ也なり冬ふゆ也なり ○西園さいえん与よ初しよ日にち多おほ雀せき也なり夏なつ也なり冬ふゆ也なり

初しよ日にち多おほ雀せき也なり夏なつ也なり冬ふゆ也なり ○西園さいえん与よ初しよ日にち多おほ雀せき也なり夏なつ也なり冬ふゆ也なり

初しよ日にち多おほ雀せき也なり夏なつ也なり冬ふゆ也なり ○西園さいえん与よ初しよ日にち多おほ雀せき也なり夏なつ也なり冬ふゆ也なり

初しよ日にち多おほ雀せき也なり夏なつ也なり冬ふゆ也なり ○西園さいえん与よ初しよ日にち多おほ雀せき也なり夏なつ也なり冬ふゆ也なり

初しよ日にち多おほ雀せき也なり夏なつ也なり冬ふゆ也なり ○西園さいえん与よ初しよ日にち多おほ雀せき也なり夏なつ也なり冬ふゆ也なり

△小隼

○李燭鷹鵯按論云姑就其擊者而言

之曰海青鵯曰大小鷗鷗○三才圖會曰海東青異名

記曰登列海岸有鳥如鷗自高麗飛渡海岸名海東青擊

物最健善擒天鷹飛時旋風直上雲際○鷗言其飛也

物最健善擒天鷹飛時旋風直上雲際○鷗言其飛也

物最健善擒天鷹飛時旋風直上雲際○鷗言其飛也

物最健善擒天鷹飛時旋風直上雲際○鷗言其飛也

物最健善擒天鷹飛時旋風直上雲際○鷗言其飛也

物最健善擒天鷹飛時旋風直上雲際○鷗言其飛也

物最健善擒天鷹飛時旋風直上雲際○鷗言其飛也

物最健善擒天鷹飛時旋風直上雲際○鷗言其飛也

物最健善擒天鷹飛時旋風直上雲際○鷗言其飛也

物最健善擒天鷹飛時旋風直上雲際○鷗言其飛也

物最健善擒天鷹飛時旋風直上雲際○鷗言其飛也

物最健善擒天鷹飛時旋風直上雲際○鷗言其飛也

物最健善擒天鷹飛時旋風直上雲際○鷗言其飛也

物最健善擒天鷹飛時旋風直上雲際○鷗言其飛也

物最健善擒天鷹飛時旋風直上雲際○鷗言其飛也

物最健善擒天鷹飛時旋風直上雲際○鷗言其飛也

物最健善擒天鷹飛時旋風直上雲際○鷗言其飛也

物最健善擒天鷹飛時旋風直上雲際○鷗言其飛也

物最健善擒天鷹飛時旋風直上雲際○鷗言其飛也

物最健善擒天鷹飛時旋風直上雲際○鷗言其飛也

物最健善擒天鷹飛時旋風直上雲際○鷗言其飛也

物最健善擒天鷹飛時旋風直上雲際○鷗言其飛也

物最健善擒天鷹飛時旋風直上雲際○鷗言其飛也

物最健善擒天鷹飛時旋風直上雲際○鷗言其飛也

物最健善擒天鷹飛時旋風直上雲際○鷗言其飛也

物最健善擒天鷹飛時旋風直上雲際○鷗言其飛也

物最健善擒天鷹飛時旋風直上雲際○鷗言其飛也

物最健善擒天鷹飛時旋風直上雲際○鷗言其飛也

物最健善擒天鷹飛時旋風直上雲際○鷗言其飛也

李燭鷹鵯按論云姑就其擊者而言

三才圖會曰海東青異名

記曰登列海岸有鳥如鷗自高麗飛渡海岸名海東青擊

物最健善擒天鷹飛時旋風直上雲際

鷗言其飛也

鷗言其飛也

鷗言其飛也

鷗言其飛也

鷗言其飛也

鷗言其飛也

鷗言其飛也

鷗言其飛也

鷗言其飛也

鷗言其飛也

鷗言其飛也

鷗言其飛也

鷗言其飛也

鷗言其飛也

鷗言其飛也

鷗言其飛也

鷗言其飛也

鷗言其飛也

鷗言其飛也

鷗言其飛也

鷗言其飛也

鷗言其飛也

鷗言其飛也

鷗言其飛也

鷗言其飛也

鷗言其飛也

鷗言其飛也

鷗言其飛也

鷗言其飛也

△鷗鵯

○詩疏曰雀鷹春化布穀亦雅謂之茅

鷗鵯人謂之擊正或謂之題肩○順和名曰廣雅曰鷗鵯

帝肩二音漢鷗鵯也○其又雅謂之秋の鷗鵯又曰肩は日き秋

語抄曰乃世鷗鵯也

○其又雅謂之秋の鷗鵯又曰肩は日き秋

語抄曰乃世鷗鵯也

○其又雅謂之秋の鷗鵯又曰肩は日き秋

語抄曰乃世鷗鵯也

○其又雅謂之秋の鷗鵯又曰肩は日き秋

語抄曰乃世鷗鵯也

○其又雅謂之秋の鷗鵯又曰肩は日き秋

語抄曰乃世鷗鵯也

○其又雅謂之秋の鷗鵯又曰肩は日き秋

語抄曰乃世鷗鵯也

○其又雅謂之秋の鷗鵯又曰肩は日き秋

語抄曰乃世鷗鵯也

○其又雅謂之秋の鷗鵯又曰肩は日き秋

語抄曰乃世鷗鵯也

△鷗子

○禽經曰鷗生三子一鷗一鷗一鷗小

於鷗其脰上下亦取身雀如據摺也一名鷗子○順和名

曰廣雅曰鷗子音律漢語抄鷗鵯也○其又小鷗子と秋の鷗鵯

其外秋の鷗子と云つて秋の鷗子の外に秋の鷗子の外に秋の鷗子の外に

其外秋の鷗子と云つて秋の鷗子の外に秋の鷗子の外に秋の鷗子の外に

其外秋の鷗子と云つて秋の鷗子の外に秋の鷗子の外に秋の鷗子の外に

其外秋の鷗子と云つて秋の鷗子の外に秋の鷗子の外に秋の鷗子の外に

其外秋の鷗子と云つて秋の鷗子の外に秋の鷗子の外に秋の鷗子の外に

其外秋の鷗子と云つて秋の鷗子の外に秋の鷗子の外に秋の鷗子の外に

其外秋の鷗子と云つて秋の鷗子の外に秋の鷗子の外に秋の鷗子の外に

其外秋の鷗子と云つて秋の鷗子の外に秋の鷗子の外に秋の鷗子の外に

其外秋の鷗子と云つて秋の鷗子の外に秋の鷗子の外に秋の鷗子の外に

其外秋の鷗子と云つて秋の鷗子の外に秋の鷗子の外に秋の鷗子の外に

其外秋の鷗子と云つて秋の鷗子の外に秋の鷗子の外に秋の鷗子の外に

詩經風曰七月鳴鷗○日本紀私記曰

百舌鳥○時珍本草曰伯勞一名鷗音一名鷗音決按曹

植惡鳥論云鷗聲喚々故以名之感陰氣而動殘害之鳥

也世傳尹吉甫信后妻之讒殺子伯奇后化為此鳥故所

一名促織一名終緯一名蟋蟀○淮南子曰促織聲嬾婦
 馨○時珍本草曰促織蟋蟀也一名蝥一名蜻蜉陸機詩
 美疏玄似蝗而小正黑有光澤如漆有翅及角善跳好闘
 之秋後則夜鳴風云是也○頃和名曰蟋蟀和名木里
 ○藤垣五世俗まり如本つらさむらひらへんを鳴しそのやうな布の敷
 て何れとてつらさむらひらへんを鳴し如本つらさむらひらへんを鳴し
 又馬を鳴しつらさむらひらへんを鳴し如本つらさむらひらへんを鳴し

つらさむらひらへんを鳴し如本つらさむらひらへんを鳴し
 ○八雲山お田蟋蟀和名つらさむらひらへんを鳴し
 名と云はくつらさむらひらへんを鳴し如本つらさむらひらへんを鳴し

蟋蟀又蝥と云ふ秋の夜別居鳴と云歌を切つめく和名つらさむらひらへんを鳴し
 およまひらへんを鳴し和名つらさむらひらへんを鳴し
 竈馬促織和名つらさむらひらへんを鳴し

ましつらさむらひらへんを鳴し和名つらさむらひらへんを鳴し
 名一虫と云ふつらさむらひらへんを鳴し和名つらさむらひらへんを鳴し

万十 秋風之寒吹奈倍吾屋前之淺茅之本和名つらさむらひらへんを鳴し
 古今和名つらさむらひらへんを鳴し

秘蔵 字景曰蟋大如筆管長三寸知雨至則於草本下藏身
 是等津虫もつらさむらひらへんを鳴し和名つらさむらひらへんを鳴し

いしつらさむらひらへんを鳴し和名つらさむらひらへんを鳴し

いしつらさむらひらへんを鳴し和名つらさむらひらへんを鳴し
 蟋蟀有二種高脊者善鳴其声如日和名つらさむらひらへんを鳴し
 清美而西干松蟲又窄脊者尻有剌刺不鳴和名つらさむらひらへんを鳴し

土竈雞一名按竈雞似促織而小也亦淡身固而足長秋夜鳴
 聲似蟋蟀而細小寂寂寒 莎雞絡和名亦利收里須一名
 按莎雞青色者多褐也者少蓋褐里黃也似麻油故倍名同
 或良聲寂亮清珍養之樊中用甜瓜李或餽沙糖水冬
 亦能防寒則經數年其聲如言木利收里須故名之一二
 聲而如鼓古雌肥大善鳴一種青色而尻有刺似帶釵者
 倍呼曰多知謂太刀之書不鳴夜鳴 蠶斯一名斯多於里
 按蠶斯長二寸許青色尖首長脚有毛露眼其間甚狹
 而非側有二硬鬣小兒戲捕兩足曰汝織機當去則屈服
 俯仰狀似織機故名之詩曰五月斯蠶動股者母也其老
 者灰赤也里點善跳作聲如曰吉々 蟻和名以稱豆
 按樊蠶似蠶斯而小長一寸許青色尖首兩眼
 名春泰 間廣但蠶斯兩眼間狹以之為異耳其首似社人善立鳥
 帽子狀故倍呼曰祿宜小兒捕兩足則伸身俯仰首似春

稻狀故和名曰稻春古名萬名者蠶其翅下有淡紫色
 阜蠶和名伊奈古名萬名者蠶其翅下有淡紫色
 小青白色生田稻夜在株朝上於稻吞稻露故名稻子取
 之炙食味甘美如小蝦又取同而灰色在田野而跳地者
 即土蠶也其大者灰皂也斑而大於莎雞跳作聲如曰吉
 之似蠶斯聲陳燕器所謂蠶狀如蝗有黑斑者于蛭蚧
 異類同穴為雄雄得之可入媚藥者是矣生尋常草者名
 草蠶亢蠶在田稻吞露而無為害稻如不茂盛則冬蠶亦
 少然則雖多有不厭也劉歆云負蟻性不食穀食穀為災
 也 蟻倍曰汲太汲太即阜蠶之屬長三四寸自甚
 瘦方首兩額有眼目工有二鬣翅灰赤色黑點腹下白善
 跳難捕本草綱目似蠶斯而細長曰蟻蠶是也

蓑虫

○古今注曰採蘭雜志曰結草蟲一名木

鑑曰志比羅魚訓如字名江東諸浦間采之頭四尾細鱗
 小也如師莫味亦類未詳鮓鮓鮓鮓而海有下大及二三尺者曝乾作
 脯号謂熊引未知下以何名之土侏海濱多采之

一葉

淮南子曰一葉

院子亭牛乳の心と 私日記に云く此の心は... ○

△佛桑花

○本綱曰枝桑產南方乃木槿別種

也其樹莖葉皆如桑葉光而厚木高四五尺而枝葉婆娑其花有紅黃白三色紅者尤貴呼曰朱槿花色五出大如蜀葵重敷柔沢有蓋一條長如花葉上綴金屑朝開暮落自五月始至中冬乃歇挿枝即活○と世派伝ふり...

今人為我常を種も性も柔を畏れと云く... ○秉燭

○頰桐花

○介雅云頰桐夏花紅如火刺桐出

泉列花先葉後則五穀時珍本草云陳者頰桐譜云頰桐身青葉四大而長高三四尺便有花成朵而繁紅色如

火為夏秋榮觀○和名...

○蜀漆

○蕪頌口經曰臭梧桐常山海列出

者葉似楸葉八月有花紅白色子碧色似山楝子○本草云常山莖四有節高者三四尺葉似茗而狹長兩々相當二月生白花青萼五月結實青圓三子葶房○時珍本草曰恒山乃北岳名常山乃郡名此藥始產于此得名欽蜀漆乃常山苗也○頌和名曰蜀漆和名久佐木一乃恒山和名宇久此頰乃以此○大和...

○是木の流...

○補良守曰常山處

○神西王母桃良安曰但桃生不三年者無花此桃種子
生翌年開花淡紅色千葉而多結子大抵千葉者不結子
此一異也桃一名冬桃又名仙人桃阿面桃正字未詳樹高

不過四五尺矮勁葉亦厚深綠色花小草葉粘枝繁重開
淡紅色三月花落生葉其實百千擷生時摘去其繁者一
朵纔有四五顆則甚大冬熟肉軟而可能離核其核真紅

色種之帶生翌年高尺余而開花未見其大木蓋此與西
王母桃一類二種也格巴且杏外國物非李桃俗云豆
李樹接桃者實深赤色而光潤故号椿桃

○木瓜子

木瓜子詩曰投我以木瓜報之以瓊琚注曰
木瓜楸木也實如小瓜酢可食○明皇雜錄曰元獻皇后
思食酸味明皇告張詠因進經袖出木瓜以獻○陶弘景
本草曰木瓜最療轉筋如轉筋時但呼其名及書工作木
瓜字皆愈此理亦不可解○時珍本草曰其實如小瓜而

有鼻津潤味不木者為木瓜鼻乃花脫處非臍蒂也木瓜

燒灰散池中可以毒魚說出淮南萬畢術又大羽會曲宣

列歲貢鳥爛虫蛀木瓜入御藥局○順和名曰尔雅注云

木瓜一名楸和名本草○和列多解云りけりたはりも木瓜の

將多りのり盤い又り通るるの將けり○大和名四本邦木瓜數種あり木

瓜漢書瓜白瓜長春木瓜也又云木瓜二天也多し赤色木刺あり

果をこしこす或病腫をこすこす云々わけりて其のち肥後梅のちこす云々

月ゆき○是もむきやして果は酸之に味あり○天石 世俗驟に木瓜乃酢をこす

今も大和をこすも時珍の菓を毒生もの候ありて候候得ぬ○良安曰世

稱木瓜者不合本草注乃是木桃而非木瓜自武列及江

列多出之藥肆以充木瓜木桃二物雖功用相近宜辨用

之近頃有唐木瓜者人參其花植庭前乃此真木瓜也葉

花實皆如所謂干本草然惟不見其大木者疑往昔本朝

唯有木桃而無木瓜子○本綱木桃乃木瓜之酸澁者小

於木^コ色微黃帝核皆粗核中之子小^コ也木^コ酸香而性脆木桃酢澁而多渣故謂之植其味劣於梨与木^コ而入蜜煮湯則香美過之其功治霍亂轉筋也与木^コ相近

○良安曰楮子^コ木桃俗云樹似海棠而叢生有刺葉亦似海棠而厚末田三月開花紅色結子似林檎而團熟則黃味木而酸澁用之充木^コ相傳此花为呪咀佛供故尋常不賞

○

萩

○

說文曰萩蕭也

○

順和名曰鹿鳴草

尔雅集注云萩一名蕭萩音一音焦蕭音宵和名波木今或新撰万葉集等用茅字唐韻茅音胡誤及草名也國史用芳宜草三字楊氏漢始抄又用鹿鳴草三字並本文未詳

○花史曰觀音菊天竺花是也五月開至七月花頭細

小其色純紫枝葉如嫩柎其幹之長与人等

○和訓多解云此

○萩神中萩云云

○萩神中萩云云

○萩神中萩云云

○萩神中萩云云

○萩神中萩云云

○萩神中萩云云

○萩神中萩云云

○萩神中萩云云

○萩神中萩云云

○萩神中萩云云

○萩神中萩云云

○萩神中萩云云

○萩神中萩云云

○ 是木の茂萩、水まじりて、つらねと連流より、水まじりて

万十 葺邊在萩之葉左上右後上秋風之吹來丹丹厚鳴渡作者未詳

○ 萩の神のあつて、萩の神萩の神のあつて、萩の神萩の神のあつて、

○ 夕々萩の心、夕々萩夕々萩の心、夕々萩夕々萩の心、

○ 萩の吹く、萩の吹く萩の吹く、萩の吹く萩の吹く、

○ 萩の吹く、萩の吹く萩の吹く、萩の吹く萩の吹く、

○ 萩の吹く、萩の吹く萩の吹く、萩の吹く萩の吹く、

△ 演萩

○ 萩の吹く、萩の吹く萩の吹く、萩の吹く萩の吹く、

○ 萩の吹く、萩の吹く萩の吹く、萩の吹く萩の吹く、

○ 萩の吹く、萩の吹く萩の吹く、萩の吹く萩の吹く、

○ 萩の吹く、萩の吹く萩の吹く、萩の吹く萩の吹く、

○ 萩の吹く、萩の吹く萩の吹く、萩の吹く萩の吹く、

○ 萩の吹く、萩の吹く萩の吹く、萩の吹く萩の吹く、

○ 萩の吹く、萩の吹く萩の吹く、萩の吹く萩の吹く、

○ 薄

○ 萩の吹く、萩の吹く萩の吹く、萩の吹く萩の吹く、

○ 萩の吹く、萩の吹く萩の吹く、萩の吹く萩の吹く、

○ 萩の吹く、萩の吹く萩の吹く、萩の吹く萩の吹く、

○ 萩の吹く、萩の吹く萩の吹く、萩の吹く萩の吹く、

○ 萩の吹く、萩の吹く萩の吹く、萩の吹く萩の吹く、

○ 萩の吹く、萩の吹く萩の吹く、萩の吹く萩の吹く、

○ 萩の吹く、萩の吹く萩の吹く、萩の吹く萩の吹く、

○ 萩の吹く、萩の吹く萩の吹く、萩の吹く萩の吹く、

○ 萩の吹く、萩の吹く萩の吹く、萩の吹く萩の吹く、

○ 萩の吹く、萩の吹く萩の吹く、萩の吹く萩の吹く、

○ 萩の吹く、萩の吹く萩の吹く、萩の吹く萩の吹く、

△ 麻 苧 穂 蔭

○ 同抄云 苧麻の穂は後秋に採るべし 苧麻の穂は秋に採るべし

△ 苧 穂 蔭

○ 同抄云 苧の穂は秋に採るべし 苧の穂は秋に採るべし

△ 旗 蔭

○ 袖中抄云 旗の穂は秋に採るべし 旗の穂は秋に採るべし

△ 篠 蔭

○ 宗抄抄云 篠の穂は秋に採るべし 篠の穂は秋に採るべし

△ 尾 花

○ 昨秋穂の穂は秋に採るべし 昨秋穂の穂は秋に採るべし

△ 尾 花

○ 昨秋穂の穂は秋に採るべし 昨秋穂の穂は秋に採るべし

○ 良 安 日 鬼 芒

一名常盤芒 葉 潤 於 常 夏 冬 綴 芒 綴 葉 有 綴 者 也

○ 鷹 羽 芒

鷹 羽 者 也 鷹 羽 者 也

○ 朝 顔

宗 奭 本 草 曰 牽 牛 花 花 朵 如 鼓 子 花 但

○ 碧 色 日 出 用 日 西 萎

○ 薺 頌 口 紐 曰 二 月 種 子 三 月 生 苗

○ 花 微 紅 帶 碧 色 似 鼓 子 花 而 大

○ 順 和 名 曰 牽 牛 子 和 名

○ 加 保

○ 小 引 長 解 云 鈴 子 花 之 名 亦 可 思 全

狀青碧色 ○ 頰和曰龜膽 和名 衣夜 美久保 ○ 藤葉云 藤膽 亦云

但一孫子持子なり云物説云合ハカサ所也天智天皇の
多岐の山 多岐異名ハ藤又藤と云能因ハカサカサト云 今に 名異名云

欽林食材云 万葉 乃色のむむり の 田のまやうさうさなるやとあこむり又太

草の葉の名あはれきあまふこさうじ ○ 他草あうさうさい持子或ハ芽を云也

古今集一 秋のれおむは 是は 咳むの 名もや 又あつーと云 皇政記の云

尾也よ 向を 咳むは 藤膽の 也れ 亦 持子 也 是と云 ○ 字紙云 藤葉の 根を 云と

○ 佛人華曰 吐といふは 藤葉の 也れ ○ 又云 藤の 根を 吐といふは 中葉の

名 藤葉の 根を 吐といふは 藤葉の 也れ ○ 又云 藤の 根を 吐といふは 中葉の

名 藤葉の 根を 吐といふは 藤葉の 也れ ○ 又云 藤の 根を 吐といふは 中葉の

名 藤葉の 根を 吐といふは 藤葉の 也れ ○ 又云 藤の 根を 吐といふは 中葉の

名 藤葉の 根を 吐といふは 藤葉の 也れ ○ 又云 藤の 根を 吐といふは 中葉の

名 藤葉の 根を 吐といふは 藤葉の 也れ ○ 又云 藤の 根を 吐といふは 中葉の

名 藤葉の 根を 吐といふは 藤葉の 也れ ○ 又云 藤の 根を 吐といふは 中葉の

名 藤葉の 根を 吐といふは 藤葉の 也れ ○ 又云 藤の 根を 吐といふは 中葉の

○ 桔梗 古名 物名 ちのぬせいのらあへるにたるととせひまはとまふとてあり

葉似杏葉而長 楯四葉相對而生嫩時亦可煮食夏開小

花紫碧色 頗似牽牛花 秋後結實 ○ 時珍本草曰 桔 結也

此草之根結實 梗直 故名 ○ 花鏡曰 以雞糞壅 則茂 ○ 頰

和名曰 桔梗 和名 向星 布 梗 ○ 藤葉云 和名とわしとて云 ○ 大和

名曰 又ゆはと八重と藤葉の草の物也と用ゆ云とありすくも云と

古名 物名 ちのぬせいのらあへるにたるととせひまはとまふとてあり

補 良安曰 桔梗苗 叢生 無枝 梗其葉似杏葉 而楯背淡

白 有微毛 自本至末 差互生 葉間開碧花 凡以紫碧者 与

桔梗之正色 又有白花者 有紫白相间者 有單葉有八重

皆變於子種 初無枝 梗剪折莖 則枝梗 其葉對生者 亦有

皆變於子種 初無枝 梗剪折莖 則枝梗 其葉對生者 亦有

皆變於子種 初無枝 梗剪折莖 則枝梗 其葉對生者 亦有

皆變於子種 初無枝 梗剪折莖 則枝梗 其葉對生者 亦有

皆變於子種 初無枝 梗剪折莖 則枝梗 其葉對生者 亦有

皆變於子種 初無枝 梗剪折莖 則枝梗 其葉對生者 亦有

皆變於子種 初無枝 梗剪折莖 則枝梗 其葉對生者 亦有

皆變於子種 初無枝 梗剪折莖 則枝梗 其葉對生者 亦有

皆變於子種 初無枝 梗剪折莖 則枝梗 其葉對生者 亦有

○ 蓀袴

故名蘭草其葉有歧俗呼燕尾香 ○ 陳翕器本草曰蘭草生沢畔婦人和油澤頭故云沢蘭盛弘之荊列記云都梁有山下有水清淺其中生蘭草因名都梁香 ○ 時珍本草曰陸機詩疏言鄭俗三月男女秉蘭干水際以自祓除蓋蘭以陳之簡以閑之其美一也淮南子云男子種蘭美而不芳則蘭須女子種之乃蘭之名或因乎此其葉似菊女子小兒喜佩之則女蘭孩菊之名又或以此也古人蘭蕙皆稱香草如零陵香草都梁香草後人省之通呼与香草爾近世但知蘭花不知蘭草之々沢蘭一類二種也俱生水傍下湿处二月宿根生苗成叢紫莖素枝赤節綠葉之對節生有細齒但以莖節長而葉光有歧者為蘭草莖微方節短而葉有毛者為沢蘭嫩時並可採而佩之八九月後漸老高者三四尺開花成穗如雞蘗花紅白色中有細

○ 宋馬志同室本草曰蘭草葉似馬蘭

子礼記佩悅蘭芷楚辭紉秋蘭以与佩西京雜記載漢時池苑種蘭以降神或雜粉藏衣書中辟蠹者皆此二蘭也今吳人藉之呼為香草或云家藉者為蘭草野生者為沢蘭亦通 ○ 本草蘭正誤時珍曰近世所謂蘭花非古之蘭草也蘭有數種蘭草沢蘭生水旁山蘭即蘭草之生山中者蘭花亦生山中与三蘭迥別葉如麥門冬而春花葉如菅茅而秋花黄山谷所謂一幹一花為蘭一幹數花為蕙者蓋因不識蘭草蕙草遂以蘭花強生分別也蘭草与沢蘭同類故陸機言蘭似沢蘭但廣而長節離騷言其綠葉紫莖素枝可紉可佩可藉可膏可浴鄭詩言士女秉蘭應邵風俗通言尚書奏事懷香握蘭礼記言諸侯贄薰大夫贄蘭漢書言蘭以香自燒也若夫蘭花有葉無枝可玩而不可紉佩藉浴秉握膏焚設朱子離騷辨證曰古之香草必花葉俱香而燥湿不變故可以佩今之蘭蕙但花香而葉

吹則愈茂盛其葉花与家蘭全無異也 ○今多見蔭列
者者多見之少之石の例にまをりて如く標標皮をひく包をて樹下及
簷下子懸るる處に水むを畏日也秋間多と用く少を秋に許す ○
補 良安曰風深山有之樞椴等幹間多有之葉形似万年
青而細小其長二三寸六月抽一莖開小白花末曲微香
奈吾蘭 風蘭之類形相似葉長三四寸亦不著土能活
開黃花香佳自產廣出之曰有深谷難採 琉球風蘭葉
長尺許似蘭而柔抽莖開小白花微有風蘭之狀蓋此觀
音草之白花者也

○蘘香 蘘頌口絰曰蘘香北人呼為茴香声
相近也三月生葉似老胡荽極疎細作叢至五月莖粗高
三四尺七月生花頭如金蓋黃色結實如麥而小青色北
人呼為土茴香八九月采實 ○時珍本草曰俚俗多懷之
衿社咀嚼恐蘘香之名或以此也北人得之咀嚼薦酒 ○

頌和名曰兼名苑云懷香一名懷芸 和名久礼 ○ 是又茴香
乃少法之 在香之類也 乃於毛 ○ 物類考云此の如也
乃少法之 在香之類也 乃於毛 ○ 物類考云此の如也

補 文 ○ 良安曰懷香雖為大茴香今唯稱大茴香者八角茴
香也 本朝未 稱小茴香者即此蘘香也 俚多種之用高三
四尺肥莖粉青色細葉淺綠如絲柔韌夏開小花淡黃色
結子形也似批麥而小有筋絞中子如瓢与皮同色難見
飛散處能生苗其莖葉雖瀟漚甚香臭不可食

○ 香木 陶氏本草曰青木香葉似羊蹄而長
大花如菊 ○ 蘘頌口絰曰開紫花 ○ 又曰地榆宿根三月
內生苗初生布地獨莖細長直上高三四尺對分出葉之
似榆葉而稍狹細長似鋸齒狀青色七月開花如槌 ○ 陶
弘景曰地榆其花子紫黑色如豉故又名玉豉 ○ 古作誤曰

花而人家忌之不種也唐人呼山慈姑曰無名草惡葉花不相見亦同意也九十月生苗似蒜葉而長有劍脊四散布地紀列人用藉蜜柑籠中四月葉枯徒為空地七月抽一莖尺余莖端開花七八朵有青節每朵開紅花六出狹長攢簇如深紅絲紐每瓣著赤蕊七筋長而端戴小形如伊乃牟土而初赤後黃老則花綠變白亦有之秋分盛開故名彼岸花小兒取之寸寸折之脆而皮不絕畧作念珠狀掛頸為戲莖汁必臭又法華經曰摩訶曼陀羅曼珠沙華乃曼陀羅花今云朝鮮朝白也曼殊沙花此石蒜也

○鬱金花 ○元朱震亨補遺本草曰鬱金古人用治鬱遏不能升者恐余名因此也 ○蘓恭本草曰苗似薑黃花白質紅末秋出莖心而無實 ○三才圖會曰四月初生苗似薑黃花白質根黃赤也 ○方輿考曰葉美人蕉檀栾花似之也 ○二月根之薑乃其葉也 ○七月十月

○益母草 ○詩曰中谷有蓷暵其乾矣 注 蓷 雖也 葉似蓷方莖白花々生節間即今益母草也 ○蘓頌曰經曰荒蔚郭璞注亦雅云葉似蓷方莖白花々生節間々生花實五月采之又曰九月采實 ○時珍本草曰此草及子皆荒盛密蔚故名荒蔚其功宜于婦人及明目益精故有益母之稱節々生穗叢簇抱莖四五月間穗以開小花紅紫色亦有微白色者 ○頌和名曰荒蔚 和名女 ○秋

○神良安曰益母草莖似胡麻而葉似麻其葉兩々對生而一層指東西一層指南北更為十字節々著小花 ○秋

字

○ 酸醬

○ 神代卷曰有大蛇頭尾各有八歧眼如赤酸醬此云阿箇 ○ 楊慎丹鉛錄曰酸醬可愛者同之

○ 時珍本草曰酸醬以子之味名也苦葺苦耽以苗之味

名也灯篋皮弁以角之形名也王母洛神珠以子之形名

也五月入秋用小花黃白色紫心白蓋其花如盃形狀子瓣

他右五尖結一鈴殼凡五稜一枚一顯下懸如灯篋之形

殼中一子狀如竜葵子生青熟赤 ○ 順和名曰酸醬保和名

豆 ○ 和訓系辭云子と小兒かまふ弄して口を合せて以之特類と云故にほろろきしあ也

又整しの好て葉をくぬ或は乃あの好て葉をくぬ俗に鬼灯の字とあるまゝ用ゆ

乃訓系辭 ○ 保代和體形各卷云乃の好て葉をくぬ ○ 下略 ○ 和

乃の好て葉をくぬ ○ 苦葺苦耽乃の好て葉をくぬ ○ 乃の好て葉をくぬ

用小花純白蓋亦白色蒂青 武列江戶豊後平家山河

列茨田郡多出之宿根自生

○ 三七菝

○ 時珍本草曰三七級人言其葉充三右四故名三七春生苗夏高三四尺葉似菊艾而勁厚

有歧尖莖有赤稜夏秋開黃花蕊如金絲盤紐可愛而氣

不香乾則吐絮 ○ 多識篇曰三七今案美豆与豆源久

死時採山漆葉入汁於臍口即活故臍池傍必植之

○ 良安曰養金魚如料

○ 翁草

○ 本草曰麥門冬一種葉麥門冬と云

○ 按順和名ト云ト云

○ 補良安曰翁草俗

山谷及人家有之初春生苗葉似麥門冬而純白頗如白

髮故名三四月及長葉皆變綠色中心抽一莖生小花淡

紫色秋冬枯死 ○ 又石抄云冬令仍存其根同種之根也とひくく時ら
夏や秋冬に枯死すとありてはしるす但是等のゆきより変じり時と季し
せしむるも一し秋の初より春まで白く弱きなりと云ふ一はありや今
あるものより一は冬の名より弱きありと考ふ

○ 観音草

○ 藏器本草曰吉祥草今人種一種

草葉如漳蘭四時青翠夏開紫花成穗紫繁 ○ 石抄云四時觀

音草葉如大葉麥門冬而高丈似蘭庭有二栽無花又無門冬也捨是皆祥草似す

然と夏開花を成穂と云 観音草と云 ○ 梅と石抄の観音草を云ふは無花の二種

似す一は石抄より云ふは用と云ふはありと云ふ也 ○ 神良安曰観音草 名詳

葉似蘭葉而狭短又似石葛葉而無釵脊深青色四時不

凋六月抽莖着小花作穗淡紫色落蕾可愛京師中元日

用莖葉縛蓮飯蓋取観音之名氏云 一種有白花者曼

乃變於實生者也俗以弄琉球風蘭愛其異稱之耳

○ 久火草

○ 本草綱目蘿藦集解時珍曰一種

莖葉及花皆似蘿藦但氣臭根紫結子圓大如豆生青熟

赤毒異此則蘿藦所謂女青似蘿藦陳藏器所謂二物相

似者也 ○ 同濕草部女青集解時珍曰女青有二一是一藤

生乃蘿藦所說似蘿藦者一種草生則蛇銜根也 ○ 大和

草曰蔓草の女青ハ俗名藤と云ふと云ふと云ふ藤蘿子似く果しむ蘿

藤子ハ藤子一葉ハ女青ハ藤と云ふと云ふ藤蘿子似く果しむ蘿

藤子ハ藤子一葉ハ女青ハ藤と云ふと云ふ藤蘿子似く果しむ蘿

藤子ハ藤子一葉ハ女青ハ藤と云ふと云ふ藤蘿子似く果しむ蘿

藤子ハ藤子一葉ハ女青ハ藤と云ふと云ふ藤蘿子似く果しむ蘿

藤子ハ藤子一葉ハ女青ハ藤と云ふと云ふ藤蘿子似く果しむ蘿

藤子ハ藤子一葉ハ女青ハ藤と云ふと云ふ藤蘿子似く果しむ蘿

藤子ハ藤子一葉ハ女青ハ藤と云ふと云ふ藤蘿子似く果しむ蘿

藤子ハ藤子一葉ハ女青ハ藤と云ふと云ふ藤蘿子似く果しむ蘿

藤子ハ藤子一葉ハ女青ハ藤と云ふと云ふ藤蘿子似く果しむ蘿

藤子ハ藤子一葉ハ女青ハ藤と云ふと云ふ藤蘿子似く果しむ蘿

藤子ハ藤子一葉ハ女青ハ藤と云ふと云ふ藤蘿子似く果しむ蘿

藤子ハ藤子一葉ハ女青ハ藤と云ふと云ふ藤蘿子似く果しむ蘿

藤子ハ藤子一葉ハ女青ハ藤と云ふと云ふ藤蘿子似く果しむ蘿

藤子ハ藤子一葉ハ女青ハ藤と云ふと云ふ藤蘿子似く果しむ蘿

は一條
又石神

蓮子飛

○爾雅曰菡又藪也 ○陸機曰菡蓮

青皮裏白子菡菡中有青菡味甚苦詔曰苦如菡

格物論云蓮荷實每一仰多至二三十房每房一殼之中

一菡五月中生噉脆至秋末菡成 ○藥頌曰菡的也子在房中

秋黑而沉水存石蓮子 ○時珍本草曰菡的也子在房中

點々如的也的乃凡物點注之名菡猶意也含花在內也

古詩曰食子心無棄苦心生意存是也 ○如屋山流のあゝあゝ

多く敷申らんかのつゝ飛ぶるをばまじりてふ俗言也 ○如屋山流のあゝあゝ

多く敷申らんかのつゝ飛ぶるをばまじりてふ俗言也 ○如屋山流のあゝあゝ

子と下をてさうゆるまよ

老のまよゆる蓮のむのふ君のまよゆるまよゆる

刀豆

○本草曰刀豆一名扶釵豆 ○時珍本

草曰刀豆以莢形命名也案段成式酉陽雜俎曰無浪有

扶釵豆莢生橫斜如人扶釵即此豆也三月下種蔓生引

一二丈葉如豇豆葉而稍長大五六月開紫花如蝶形

結莢長者近尺微似阜莢扁劍脊三稜宛然嫩時者火食

醬食蜜煎皆佳子大如拇指頭淡黃色 ○如屋山流のあゝあゝ

家園圃に種く食之まじりてさうゆるまよゆる

隱元豆

○救荒本草曰眉兒豆 ○或云如豆の隠元

一名藏眉豆亦一物又鄉談云高梁豆月形葉が異之物と

云一物 ○ちゆりまのてい中華より傳へるを種秋のまゝ食之

るの蔓生と嫩時莢ととも若火食も亦好く及元豆とも稱はる

るの蔓生と嫩時莢ととも若火食も亦好く及元豆とも稱はる

るの蔓生と嫩時莢ととも若火食も亦好く及元豆とも稱はる

○神本綱曰菡豆二月下種蔓生延纏干籬垣葉大如盃

團而有尖其花狀如小蛾有翅尾形其莢凡十餘樣或長

或團或如龜爪虎爪或如猪耳刀錄種々不同皆累之成

枝白露后實更繁行嫩時可充蔬食茶料老則收子煮食

實有黑白赤斑四色○良安按菹豆本朝自古有而不甚
 用黃麟隱元禪師來朝以後処々多種之其葉大似紫頭
 豆嫩葉煮食六月開花紫白相夾似藤花而短向上其長
 四五寸每瓣頗如蛾狀其莢長二三寸收豆每種如栗色
 或黑色紫耳処正白而大如黑大豆 一種葉花同而莢
 有微毛硬而不可食倍云加末未是乃菹豆之種類也人雖不
 種自憂成之亦有 白扁豆即菹豆之白扁者也花色亦
 白出於日向者良山列撰列者次之皆勝於唐菹

○夕魚實 ○菹茶本草曰瓠瓢形狀大小非一夏
 未始實秋中方熟取 ○佛華曰夕魚の實ハ秋多瓠葉より折ると
 乃ハあまの瓢しと云ふは 葉より折ると之を割ると瓢と名を
 を各々多し食むを云ふは 瓠葉より折ると瓢と名を各々多し食むを云ふは
 るるはと云ふは 瓠葉より折ると瓢と名を各々多し食むを云ふは

ひきこちや夕魚の痛むもと云ふこと多し ○瓢の後夏より秋より一
 乃秋より秋よりと云ふこと多し ○瓢の後夏より秋より一

○早稻 早田 ○廣志曰早稻有紫芒稻赤糠稻今按
 稻熟有早晚取其名 ○時珍本草曰粳稻六七月收者為
 早粳止可充食八九月收者為暹粳十月收者為晚粳稻
 氣涼乃可為藥 ○順和名曰早稻和名晚稻 暹粳和名於 粳和名
 字流 ○和名暹粳曰暹粳也和名暹粳 暹粳中略之也
 万十 城端等行相乃速稻平野時余來下茅子乃花咲
 同早田 吾之蔭有早田乃穗立造有蔓曾見乍師奴世吾答
 同報贈早 吾妹見之葉如造有秋乃由早穗乃蔓雖見不飽可聞
 △室早早 ○佛華曰室早もやとせいこれぬくと云ふは早稲の
 是も室早もやとせいこれぬくと云ふは早稲の

作者 未詳
 坂正大塚
 大伴家持

大芥とよとの類し記す是を部とて芸の一類也如うをたおの類海通ともよの
心術しよとて大芥とよとて市人皆好む詠うふは志好むとて芥葉を盛て作るを
芥葉とてしるすなり

芥 志房

○神良安曰芸草 音云倍云留字多虫語也能治 芥天正

年中虫人將來名留字多春生苗似雞腸草及蒿類而有

刻甚甚臭香至秋不花生穗實似帚草莖穗能治瘡疥折

傷惡腫及^惡被^毒蟻者擣葉俾之置床褥下避虱蚤^綱書曰

篋中蠹不生字彙曰芸香草也可辟書蠹^介雅翼曰仲冬

月芸始生似邪蒿而香可食者恐此草矣 沈括曰芸類疏

葉芬香秋後葉同微白如粉今謂

之芥里香但此說不當耳可考

